

物語の現実感

——源氏物語の世界構築について——

成田大知

…野分の段は、『源氏物語』全文中名文の聞えが高い。

(玉上琢彌『源氏物語評釈』)

「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮のほど」^[1]と始まる桐壺巻野分の段。愛する桐壺更衣を亡くし、悲嘆に昏れる桐壺帝のある一日を描くこの段は、『源氏物語』切つての名文として、多くの人の高く評価するところであった。

此の段は須磨巻の有名な一節と共に確に源氏物語の抒情詩味を最もよく鑑賞せしめ得る代表的な名文章で抒情文学としての源氏物語の特色が鮮やかに発揮されてゐる部分であることを注意しておきたい。

(島津久基『対訳源氏物語講話』)

名文の綴る物語の舞台、それは「さなきだに見るもの聞くものすべて物思わせ」、「人々に悲傷の限りをつくさず」「秋」(玉上前掲書)のある一日であった。「野分の吹く秋の季節は、見るもの聞くものすべて物悲しく、人に悲しみの極みをつくさせる」(玉上琢彌編『鑑賞日本古典文学 源氏物語』)。しかし、島津、玉上両氏共、野分の段の文章の美しさを強調するが、野分の段の時季が具体的に何月頃のことであるのかを語らない。そもそも、その「秋の季節」とは、何月のことだったのであろうか。

清水好子氏は野分の段の時間について、「秋のある一日の

夕べ」の「特定の頃合」を描いていると言う。

「野分だちてにはかに肌さむき夕ぐれのほど」と、その秋のある一日の夕べに限られてきた。一日の夕べとだけでなく、時刻もほぼ限定した。

「靱負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしき程に出し立てさせたまひて」。「夕月夜のをかしき程」と、特定の頃合が決められたことは特定の空間が選ばれたことになろう。

〔場面と時間〕『源氏物語の文体と方法』しかしながら、具体的にそれは何月のことなのか、問題にはされない。

野分の段の具体的な時季については、わずかに、本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』の中で論じている程度である。

はた寒き十のひら はたは又の意にて、又寒くもありといふ意の詞也。そは秋になりて、大かたはまだ暑くて、涼しきがこ、ちよきころ、俄かにあまり涼しくなりて、こ、ろよきながら、はや又すこし寒くもある意也。今もさることある物也。さる故に此詞は、かならず八月ごろにのみいへり。心をつくべし。…拾遺に、萬葉の膚寒を引ていへるは、ひがごと也。かの膚寒とは別なるをや。

〔『源氏物語玉の小櫛』〕

宣長は「かならず八月ごろにのみいへり」と、野分の段の時季を八月とした。根拠は「はた(将)寒き」である。「涼しきがこ、ちよきころ、…はや又すこし寒くもある」という季感が八月に相応しいと言う。

しかし、「将寒き」は一般的には「膚寒き」と解されている。

宣長が批判した契沖『源註拾遺』には、
にはかにはたさむき夕暮 … 萬葉に膚の字を書てはたへ
さむしとよめる歌おほし。将の字をかける事なし。

〔『源註拾遺』〕

とあった。だが、契沖の言うように『萬葉集』に「はたへさむし」と詠む歌は必ずしも多くない。わずかに、

蒸し衾なごやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも

(巻四・五二七)

の結句「肌之寒霜」が「はたゑさむしも」(類聚古集)、「ハタヘサムシモ」(西本願寺本)と訓まれるのみである(佐佐木信綱他『新訂増補 校本萬葉集』)。しかし、「萬葉に」「将の字をかける事なし」というのは妥当なものである。

また、宣長の「にはかに将寒き」という解釈には、語法の面でも、理解に苦しむところがある。「涼しきがこ、ちよき

ころ、：はや又すこし寒くもある意也」と言うことからすれば、宣長は「涼しき」と「寒き」とを並列して考えているようであるが、「にはかに将寒き」と解した場合、「又の意」という「将」の用法からすれば、それは「にはかに」と「寒き」とが並列されていると考えるべきであろう。しかし、それは宣長の考えとは異なることになるし、何よりも物事の急激な変化の様を表わす「にはかに」と皮膚感覚である「寒き」とを並列させて考えることは不適切である。故に、宣長の「将寒き」説は成立しないものと考えられる。

根拠が揺らぐ以上、「かならず八月ごろにのみいへり」とする宣長の八月説は再考を要することとなる。野分の段の時は季は一体、何月であったのであろうか。

二

「膚寒」しという季感はいつ頃のものか。曾禰好忠『毎月集』に注目すべき歌があった。

膚寒く風は夜ごとになりまさる我見し人は訪れもせず

(八月中)

『毎月集』は「一日に一首を当て」た「一年間の歌日記と

も見られ」る(『好忠集』解説)、『日本古典文学大系 平安鎌倉私家集』)。これからすれば、「膚寒く」なる「風」を詠んだこの歌は「八月中」、すなわち八月中旬のものということになる。これによるならば、野分の段の時季が八月であった蓋然性が新たに出てくることになる。

さらに、その「膚寒」さを覚えさせる要因となった「野分」は何月頃の景物であったのだろうか。

八月、野分荒かりし年、 (蓬生卷)

八月は故前坊の御忌月なれば、：野分、例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。 (野分卷)

(八月) 十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。：風野分だちて吹く夕暮に、 (御法卷)

『源氏物語』では、八月の景物として「野分」が描かれている。「野分」そのもの、あるいは「野分だちて」であつても、描かれる時季はいずれも八月。野分の段の「野分」も八月であつた蓋然性は高いと言えよう。

野分の段の時季を考える上では、後に描かれる「虫の声」や「鈴虫」も参考になる。命婦が更衣の里邸を後にする場面、ここでは「虫の声々」が描写されており、命婦が出立に際し、更衣の母である北の方へ贈った歌にも、「鈴虫の声」が詠ま

れている。

月は入りかたの空清う澄みわたれるに、風いと涼しくな
りて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離
れにくき草のもとなり。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな
えも乗りやらす。
(桐壺卷・野分の段)

「鈴虫」と言えは、『源氏物語』にはその名を巻名とする巻
があった。

十五夜の夕暮に、…例のわたりたまひて、「虫の音いと
しげう乱るる夕かな」とて、…げに声々聞こえたるなか
に、鈴虫のふり出でたるほど、はなやかにをかし。

(鈴虫卷)

柏木との密通の後、発心した女三の宮のもとを源氏が訪ね
る場面。前庭には野の風情を演出するため、秋の虫が放たれ、
「鈴虫」がすだく。その時季は本文始めにあるように、「十五
夜」。やはり、八月であった。

『古今和歌集』『秋歌』にも、「秋の虫」を詠んだ歌十首
(一九六―二〇五)が収められている。『古今和歌集』の部立
の内部は、撰者達の「なんらかの秩序と統一とを附与する編
集操作」がなされており、「古今集編纂当時、春・夏・秋・

冬の四季に対しては、各々を三分し、初・仲・終とする思考
が存してゐた」らしい(松田武夫『古今集の構造に関する研
究』)。さらに、「各月に割り当てられた歌は、主題を中心に
して観察することも可能であ」り、「主題を月割りにするの
であるが、その場合、判断の規準になるものは、七月七日の
七夕、八月十五夜の秋月、九月九日の重陽の節句における菊
である」と言う。その規準に照らすと、「秋の虫」を詠んだ
それら十首は八月のものとなる。野分の段の時季が八月であ
った蓋然性はいいよ高くなる。

野分の段では、植物もまた、その時季を知る上で重要な存
在となる。野分の段には「八重葎」「蓬」「小萩」「浅茅」と
いう四つの植物の名が見える。その中で、秋草として知られ
るのは「小萩」、すなわち「萩」である。『毎月集』には「八
月上」から「九月中」にかけて、「萩」を詠んだ歌が四首見
える。

遠つ山宮城が原の萩見ると秋ははかなきたはれ名ぞ立つ
(八月上)

枝もたわにしをれぬるかと思ふまでいくそか置ける萩の
上の露 (同)

あらげなくおくての稲を守るまに萩の盛りは過ぎやしに

けん

(八月中)

なが月の萩の枯葉に置く露の花をしのぶる鹿の涙か

(九月中)

これらを見ると、「八月中」に「萩の盛りは過ぎ」てしま
い、「九月中」には「枯葉」となることがわかる。「萩」も八
月のもので考えてよいであろう。³⁾

「蓬」を用いた歌も『毎月集』『八月終』に見える。

なげやなげ蓬がそまのきりぎりすくれ行く秋はげにぞ悲
しき (八月終)

「蓬がそま」とは、「蓬」が柚山のように生い茂っている様
を言う。「中」と「終」というわずかな時季の違いはあるが、
「蓬」も八月に繁茂する草であったと考えられよう。野分の
段の時季は八月であったと考えてよいであろう。⁴⁾

野分の段の時季は「秋の季節」などという漠然としたもの
ではなく、八月という極めて限定された時間なのであった。
名文の誉れ高い野分の段の描く世界は、八月という具体的な
季節の、具体的な景物に支えられて構築された世界であった
のである。

野分の段が八月のこととして、では、それは八月の何日頃
のことであったろうか。これについては、「夕月夜」が手が

かりとなる。

『源氏物語』に描かれる「夕月夜」の例。

九月七日ばかり…はなやかにさし出でたる夕月夜に、

(賢木卷)

五六日の夕月夜は疾く入りて、

(篝火卷)

七日の夕月夜、かげほのかなるに、

(藤裏葉卷)

「夕月夜」とは、五日から七日前後の月であったことがわ
かる。⁵⁾そして、その具体的な日付は後の「丑になりぬるなる
べし」という文言によっても、確認されるであろう。

月も入りぬ。

雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生

の宿

おほしやりつつ、燈火をかがげつくして起きおはします。
右近のつかさの宿直奏の声聞ゆるは、丑になりぬるなる

べし。(桐壺卷・野分の段)

始めに「月も入りぬ」とあるが、それは「宿直奏の声」が
聞える以前のことである。「右近のつかさの宿直奏の声」が
発せられるのは「丑一刻」(大橋家本『奥入』)、すなわち午
前一時頃。それ以前に月が入るのは何日頃の月であろうか。

「旧暦変換表」 http://calc-site.com/calendars/old_calendar

(二〇一七年十一月九日閲覧)、「国立天文台天文情報センタ―暦計算室」<http://econmk.nao.ac.jp/koyomi/> (二〇一七年十一月九日閲覧) によれば、「京都(京都府)」で「丑一刻」以前に月の入りを迎える下限は、二〇一七年で考えると、旧暦八月十二日、すなわち新暦十月一日の〇時五十七分である。但し、これは水平線での月の入りの時刻なので、実際の月の入りの時刻はもう少し早い。としても、これは野分の段の「夕月夜」を旧暦八月五日から七日前後と考えることと矛盾しない。さらに、篝火巻に「五六日の夕月夜は疾く入りて」とあることから考えれば、「夜ふけはべりぬべし：夜もふけぬ：月は入りかたの：月も入りぬ」という野分の段の月の入りはそれよりは遅いはずで、とすれば、それはおおよそ旧暦八月七日、すなわち新暦九月二十六日あたりと考えるのが相応しいということになると考えられよう。

確かに清水氏が言うように、野分の段は源氏が「三つになりたまふ年」の「秋のある一日の夕べ」の「特定の頃合」の出来事を書いていた。しかし、それは単なる「秋のある一日の夕べ」ではない。より具体的に、秋八月、それも十二日以前の、おそらく七日前後の「夕月夜のをかしきほど」から「丑一刻」という極めて限定された時間なのであった。この

ような具体的かつ限定された詳細な時間の設定が前提となり、野分の段の世界は構築されていたのだ。

三

野分の段の場面設定には、先蹤があったことが指摘されている。虚構の長編物語の先達『宇津保物語』、その首巻、俊蔭巻の「俊蔭女の侘住居とそこへ若小君(鳥津注略)が訪ねて来る場面なども」野分の段の「構図に範を示したところがあるかもしれない」と言う(鳥津久基『対訳源氏物語講話』)。「八月中の十日ばかり」、若小君は父太政大臣の賀茂詣に随行する。途中、一行は荒廢した清原俊蔭の屋敷の前を通り、若小君は屋敷の中に俊蔭女の姿を見る。その美しい姿に心を奪われた若小君は賀茂神社からの帰途、一行から外れ、屋敷に住む俊蔭女のもとを一人訪ねた。

若小君、家の秋の空静かなるに、見めぐりて見たまへば、野やぶのごとおそろしげなるものから、心ありし人の急ぐことなくて、心に入れて造りしところなれば、木立ちよりはじめて水の流れたるさま、草木の姿など、をかしく見どころあり。蓬、葎の中より、秋の花はつかに咲き

出でて、池広きに月おもしろく映れり。おそろしきこ
と覚えず、おもしろきところを分け入りて見たまふ。秋
風、河原風まじりてはやく、草むらに虫の声乱れて聞こ
ゆ。月隈なうあはれなり。
(俊蔭卷)

「八月中の十日ばかり」ということは、野分の段と殆ど同
じ時季である。夜、荒廃した邸宅に人を求めて分け入って行
くという内容も似たものであるし、描かれる景物も野分の段
のそれらと類似している。『源氏物語』野分の段がこれを参
考にしている蓋然性は考えられるであろう。しかし、『宇津
保物語』のこの場面と野分の段とを比較するならば、それぞ
れが構築した世界には格段の差が見出される。

『宇津保物語』のこの場面では、多くの景物が描かれてい
るが、それらは必ずしも具体的に描かれている訳ではない。
取り上げられた「木立ち」や「水の流れたるさま」や「草木
の姿」がどうなのか。一応「をかしく見どころあり」とは言
われるものの、具体的に説明されることはない。それも、
「木立ちよりはじめて、…草木の姿など」という書き方から
もわかるように、その叙述は対象たる景物の列挙に墮してお
り、本格的な描写にまでは至らないのである。

このように並べ立てられた事項はとかく概念的なものとな

りやすい。これら事項の描写は波線で示したように、「をか
しく」「おもしろく」「おもしろき」「あはれなり」と、漠然
とした説明に止まっている。また、列挙ということは、挙げ
られる事項と事項との間に必然的な関係がないということでも
ある。それぞれの事項は羅列されるばかりで、それらが有
機的に組み合わされて、緊密な情景が構築されるということ
もない。例えば、「池」と「月」、「草むら」と「虫の声」な
どがそれぞれ組み合わせられるが、それは秋という季節の常識
的な取り合わせにすぎない。しかも、それらは列挙の一項に
止まっていて、さらにそれらが組み合わせられて有機的な情景
が構築されることはないのである。

『宇津保物語』のこのような描写の傾向は嵯峨院巻にも見
える。

かくて、日ごろ経て、長月になりぬ。風涼しくなり、虫
の聲、御前の草木も整ひて、木の葉は色づき、草むらの
花咲き、五葉の松はのどげき色をまし、色々の紅葉、薄
き濃き、村濃に交じり、月おもしろき夕暮れに、御前
の池に月影映りて、よろづおももしろき夕暮れに、

(嵯峨院巻)

俊蔭巻と共通する景物に二重線を施した。俊蔭巻が「八月

中の十日ばかり」、嵯峨院巻が「長月」と、それぞれ時季を異にするにも関わらず、多くの景物が共通する。いずれも、秋を表現するに適した景物として、採り上げられたものである。しかも、俊蔭巻と同様、それぞれの様相が具体的に書かれることはなく、やはり、ただ列挙、配列されるに止まるのである。

このような『宇津保物語』の描写は、次の『清少納言枕草子』に書かれているような、秋の類型的な景物によって、成立しているとも言える。

荒れたる家の、蓬深く、葎延ひたる庭に、月の隈なく明かく、澄み昇りて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間より洩り来る月。荒うはあらぬ風の音。

…すべて、池あるところは、あはれにをかし。…わざとつくろひたるよりも、うち捨てて、水草がちに荒れ青みたる、絶え間絶え間より、月影ばかりは、白々と映りて見えたるなどよ。

すべて、月影は、いかなるところにても、あはれなり。

(三卷本系統『清少納言枕草子』逸文)

「蓬」「葎」「月」「風」など、類型的な秋の景物が「あはれなるもの」として、挙げられている⁽⁸⁾。これらの景物を列挙、

配列し、いかにも情趣あるものとして、構成されたものが『宇津保物語』の情景だったのではなからうか。したがって、それは極めて観念的なものに止まらざるを得なかった。

これに対して、『源氏物語』野分の段の描写は、具体的かつ詳細であり、そこにはいかにも八月という設定に相応しい情景が構築されている。更衣の里邸の荒廢を描く箇所。

やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇にくれてふし沈みたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたるこちして、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。(桐壺巻・野分の段)

この場面にも「草」「野分」「月」「八重葎」という秋の景物が描かれる。しかし、それは単純に列挙されるのではなく、「草」が「野分」に吹き荒らされ、さらにそれに「月影」が「八重葎」にも構わず差し入っていると言うように、それぞれが有機的に組み合わされて、そこには具体的で統一された情景が構築されるのである。そして、それが他ならぬ八月の情景として、いかにも現実的なものであったこと、既に述べた通りである。

しかも、その描写は極めて具体的なのであった。例えば、

「草」について。『宇津保物語』では単に「草木の姿」とのみ言われていたものが、野分の段では「草も高くなり」と描写される。同じ「草」でも、『源氏物語』では、それは「高いものであり、しかもそれは「高くな」ったものであると言う。描写は格段に具体的に詳細なものとなっている。その具体性は現実的な必然性によって支えられてもいる。「草も高くなり」。その理由として、「やめずみなれど、：闇にくれてふし沈みたまへるほどに」が加えられる。つまり、これは更衣の死後、絶望の中にあつた北の方が屋敷の手入れもできずにいた結果、「草も高くな」ってしまったということを示す。無論、そこには「その年の夏」に亡くなった更衣の死を嘆くままにむなく夏を過ごし、秋八月に至つたという時の経過が示されている。単に「草」と描写するのではなく、「高くなり」と詳細に描写するのは、そのような事実を前提としてこの場面の情景が構築されているからだと考えられる。

続く「野分にいとど荒れたる」も、『宇津保物語』の「風」が秋の景物の一点景に止まっているのに比して、具体的に詳細である。すなわち副詞「いとど」によって、漸層的な「荒れ」が表現されるのである。既に述べたような理由で里邸に「草」が生え、それが高くなった状態が第一段階。そ

の高くなった「草」がさらに「野分」の風によって、荒らされた状態が第二段階。「野分にいとど荒れたる」という表現は、単に里邸が荒れてしまったという漠然とした描写ではなく、更衣の生前と死後、そして、さらには八月野分の今とを比較して、その段階的な里邸の荒廃を空間的にも時間的にも描き出している点、具体的に精緻なのである。

結びの「月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる」。これも『宇津保物語』のように、「月」が秋の夜の単なる点景として、描かれているのではない。まず「月影」。

「月」はここでは光線として捉えられる。それが荒廃した里邸を照らし出すのである。またここでは「月影ばかりぞ」と限定、強調することによって、生い茂つた草にも構わず訪ねるように差し入るのは月の光だけだと言い、相対的に荒廃した里邸に訪ねる人はないという事実を浮かび上がらせてもいる。⁹⁾

このような具体的な描写によって構築される情景は、八月という時季に則した現実的なものとなっている。漠然として概念的とも言える『宇津保物語』の描写に比して、『源氏物語』は、具体的かつ詳細に事物を描写し、さらにそれらを有機的に関連付けることによって、その時間や空間を立体的に

構築することに成功している。

特にまた『源氏物語』は、具体的な「月」の描写によって、時間の経過をも示している。

月は入りかたの空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。
(桐壺卷・野分の段)

命婦が宮中を出る際、「をかしきほど」であった「月」も、ここで「入りかた」となり、復命後には「月も入りぬ」と描かれる。

この「月」の描写によって、「時のうつりゆくさま」が描かれることについては、夙に細井貞雄に指摘があった。

初に夕づく夜のおかしきほどにと云ひ、月かげばかりぞ、やへむぐらにもさはらずさし入りたると云ひ、月は入方の空きようすみわたれるにと云ひ、月のおもしろきといひ、月もいりぬ、と云とぢめしにて、此物語の心もちひのすぐれしを思ふべし。ひとつの月を五ぐさに云別て、其形状を知らせ、其時の有様をも思ひしらるゝごとくかきなしたり。すべてに時のうつりゆくさま、月花などのものにまで、このころを知らすることどもいと多かれば、たゞにみすぐすべきにあらず。

(無窮会神習文庫蔵『玉椿』)

野分の段の「月」は「ひとつの月を五ぐさに云別て」描写することで、時間の経過を表現していると言う。そして、「其時の有様をも思ひしらるゝごとくかきなし」ているとも言う。各場面に相応しい「月」の具体的な姿が描写されることによつて、情景においても、時間の表現においても、叙述は一気に現実味を帯びてくるのである。こうした、「月」による具体的な時間表現、それを可能にしたものは、野分の段の時季を八月七日頃とした具体的な設定であつたと考えられる。

これに対し、『宇津保物語』の「月」の描写は単純なものであつた。前に引いた嵯峨院卷の例、波線で示したように、「月おもしろき」は「夕暮れ」の状況説明であるし、「月影」は水面に映る景物としての「月」でしかない。ここでの「月」は列挙される事項の一部となつてしまっている。この場面ではこれ以降に「月」の描写はなく、時間は「曙に御簾を巻き上げて見たまふに」と、いつの間にか明け方になつてしまっている。

他の場面でも『宇津保物語』においては、

月隈なうあはれなり。

(俊蔭卷)

月のおもしろき夜、源宰相、中のおとどに立ちよりたまひて、
 (藤原の君卷)

月おもしろきに、ただ一人ながめおはするに、

(嵯峨院卷)

清涼殿の清く涼しき十五夜の月の隈なく明かきに、

(沖つ白波卷)

などと、「月」は秋の夜の典型的な景物として描かれるのみで、その表現も言わば、類型化してしまつて、具体性に欠ける。

ただわずかに俊蔭卷のみが「月」の動きを描く。

東面の格子一間あげて、琴をみそかに弾く人あり。立ち寄りたまへば入りぬ。「あかなくにまだきも月の」などのたまひて、簀子のはしにゐたまひて、「かがる住まひしたまふはたれぞ、名のりしたまへ」などのたまへど、答へもせず。内暗なれば、入りにし方も見えず。月やうやう入りて、

立ち寄るとみるみる月の入りぬれば影を頼みし人ぞ

わびしき

(俊蔭卷)

先の引用の続き、俊蔭女が屋敷の奥へと入つて行く場面。

「月やうやう入りて」と、「月」の動きを描く。これは一見、

桐壺卷の「月も入りぬ」に似た表現であるが、恐らくこれは、

『源氏物語』のように、時間の経過を暗示するものではなく、俊蔭女が奥へ「入」ることと、「月」が「入」るのを掛詞として歌に詠み込むための措辞と考えるべきであろう。いづれにしても「月」は局面的な描写であり、そこに時間の持続性を感じ取することはできない。ただ「立ち寄りたまへば入りぬ」「のたまひて」「ゐたまひて」「のたまへど」と、若小君、俊蔭女の行動が時系列に配列されることで、時間の経過が結果的に表現されるに止まる。『源氏物語』に八月七日頃の野分めいた夕べという、具体的な場面、空間時間がしっかりと構築されているのに較べるならば、両者には歴然たる違いが見られるのである。

四

野分だちて、にはかに膚寒き夕暮のほど、常よりもおぼしいづること多くて、鞆負の命婦といふをつかはす。

(桐壺卷・野分の段)

野分の段は既に冒頭から、「野分だち」「にはかに膚寒き」

「おぼしいづること多くて」という具体的な事項の、緊密な

結び付きによって、詳細で必然的な情景が作り上げられていく。

冒頭の「野分だちて」。「野分めいて」と、「野分」という事象の属性が目立つことを書くことは、その微妙な変化を言うことであり、それだけでも具体的に詳細な描写と言える。

しかし、それに止まらず、ここではそこから「にはかに膚寒き」と展開することで、「野分だちて」という気候の変化に起因し、しかも「にはかに膚寒」くなくなったという具体的な情景が提示されることにもなるのである。

この展開は気象学的にも必然的なものであった。台風は「反時計まわりの渦巻きなので、中心の東側には南から暖かくてしめった空気がはこばれてくるし、西側には北から冷たいかわいた空気がはこばれてくる」(岩波書店編『岩波科学百科』)。そして、台風は「九月になると西日本よりは東日本に上陸または接近する傾向が強くなる」(浅井富雄他監修『増補平凡社版 気象の事典』)と言う。つまり、九月に発生した台風が日本に接近した場合、台風を中心より西側には「北から冷たいかわいた空気がはこばれてくる」ことになる。すると、気温が急激に低下し、それによって「膚寒」さを感じるようになる。「野分だちて、にはかに膚寒き」とは、ま

さにこの新暦九月、旧暦で言えば、概ね八月の気象現象を表わしていると見えるだろう。これは先に見た『宇津保物語』嵯峨院巻が「長月になりぬ。風涼しくなり」と単純な展開を見せるのとは次元を異にしたものと、言うことができよう。

さらにこの「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮のほど」が全体として、「常よりもおほしいづること多くて」という帝の心情の誘因となつていくことにも、注目すべきであろう。

膚寒く風は夜ごとになりまさる我見し人は訪れもせず

(『毎月集』・八月中)

二章で示したように、「膚寒く」なるのは八月の季感であった。八月では、まだ「膚寒く」なる段階であり、完全に「膚寒く」なり果ててはいない。

同じく『毎月集』、「秋」の部冒頭に詠まれる長歌にも、
「はだ寒くなる」と詠まれている。

涼みせし 夏のくれにし ゆふべより 野への草葉を
かきわけて 吹きくる風の や、はだ寒く なるま、に
年月を 思のほかに 過しやり かひなき身をば 心の
うちに 嘆きつ、 よをなが月の すゑまでに ……

(秋)

「夏のくれにしゆふべより」「風のや、はだ寒くなるま、

に」と言う。後に「なが月」とあることからすれば、八月には「はだ寒くなる」のである。これは野分の段の時期が八月であろうことの傍証ともなる。

また、ここで注目すべきは長歌、短歌共に「風」が「膚寒く」「なるまゝに」、または「なりまさる」ことで、「心のうち」に嘆きつ、「我見し人は訪れもせず」と、「膚寒」さが感傷をもたらす要因となっている点である。八月になり、「風」が「膚寒く」なり、これが人の心を淋しくさせる、この展開はまさに野分の段に同じい。野分の段も、暑さの夏が過ぎ、「野分だちて」と、風がそよぎだし、心穏やかならざるうえに、「にはかに」「膚寒」くなつたと、いかにも八月にありそうな具体的な情景描写を周到に重ねて、やがて「常よりも……」という寂寥感へと展開する。荒れた風と、それによる急激な気温の低下によって、帝は不安を覚え、「夕暮のほど」という時間と相俟って、それが人恋しさの寂寥感となるのである。

同様の例は『萬葉集』にも見える。

旅衣八重着重ねて寝ぬれどもなほ肌寒し妹にしあらねば

(卷二十・四三七五)

蒸し衾なごやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも

(卷四・五二七)

二首いずれも「妹」と「寝」ないので、「肌寒し」または「肌し寒しも」と、感覚的に寂寥感を詠んでいる。「膚寒」さは寂しさを覚えさせる要因であったのだ。野分の段の「膚寒」しは実際の時期に則した具体的な描写であるのみならず、それに応じた感覚の面でも非常に現実的な描写であったのだ。「常よりもおぼしいづること多くて」。これは無論、帝の心情である。ということは、その心情へと至るこれまでの叙述すなわち「野分だちて」から「夕暮のほど」までの描写、就中「膚寒き」という感覚は帝のものであったと考えられるであろう。この「膚寒」さ、これは更衣を失った帝が、秋八月、それも野分の季節を迎えて一層痛切に感じた感覚であったのだ。八月の「膚寒き夕暮」になつたからこそ、寂寥感が増し、帝は亡き更衣と過ごした時を鮮明に思い出すのである。後に書かれる「おもかげにつと添ひておぼさるるにも」の「つと添ひて」という皮膚感覚に近い感覚はそれ故にこそ、覚えるものである。この表現は「思いつづけると、その人が、いつものように横に坐っている感じがする」(玉上琢彌『源氏物語評釈』)という更衣恋しさ故の帝の実感をそのまま伝えるかのようなのである。

「野分だちて、にはかに膚寒き」と、作中人物である帝の
 実感を通して描写がなされるとき、『源氏物語』の文章は、
 にわかに現実感を帯びることになるのである。

一方、『宇津保物語』にも、「膚寒」しの例が見える。

…秋深くなりゆくころの夕暮れに、秋風膚寒く、山の滝
 心すこく、鹿の音はるかに聞こえ、前の草木、あるは色
 の盛り、あるは花の散りなどしてあはれなるに、

(菊の宴巻)

源実忠の北の方が隠棲する志賀の秋を描く場面。この前後
 に、「紅葉」「雁」の記述が多いことからすれば、これは九月
 頃のことと考えられるが、「秋深く」、季節は「膚寒くなる」
 時季を過ぎて、既に「膚寒」い気候となっていた。それはい
 ずれにしても、前後の展開からして、この「秋風膚寒く」に
 は「源氏物語」ほどの含意はなく、それは「山の滝」が「心
 すこく」、「鹿の音」が「はるかに聞こえ」、「前の草木」が
 「色の盛り」または「花の散りなどして」などと、列挙され
 る事項の一つでしかない。無論、この叙述からは作中人物の
 感覚や感情を感取することはできない。感覚表現を用いなが
 らも、列挙の性格がそれらに及び、観念的な描写に陥ってし
 まっているのだ。俊蔭巻、嵯峨院巻と同じように、この菊の

宴巻の叙述も、秋という観念のもとに成った具体性に欠ける
 叙述と言うべきであろう。

一方、野分の段には、他にも、人物の自然な感覚、感情を
 表現する説得力のある叙述が多い。命婦、里邸到着の場面。

命婦、かしこにまで着きて、門引き入るるより、けはひ
 あはれなり。
 (桐壺巻・野分の段)

感覚的描写である「けはひあはれなり」。これは「表門を
 入るとたんに、牛車から見ても、涙を催すさまであり、
 「明かるい月に照らされた都大路と何という違いであろう」
 (玉上前掲書)という、里邸内と外との雰囲気の差に対する
 感慨を表現している。「けはひあはれなり」とは作者の地の
 文の説明ではあるが、また車中の命婦の感懐でもある(清
 水好子「野分の段の遠近法について」『源氏物語の文体と方
 法』)。「車中の命婦の感懐でもある」故に、それは一層、説
 得力を以って迫ってくる。以下、更衣里邸の描写がこれに続
 くが、この「けはひあはれなり」があることによって、それ
 は更衣里邸の客観的な描写ではなく、命婦の実感による
 描写となっている。

邸内に進み入った命婦は荒廃した景色を目の当たりにする。
 やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつ

くろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇にくれてふし沈みたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたるこちして、月影ばかりぞ、八重律にもさはらずさし入りたる。(桐壺卷・野分の段)

前述の通り、いかにも八月らしい情景が構築されているが、ここにもそれを前提とした、命婦の感情を窺うことができる。ここでは、北の方が「闇にくれてふし沈みたま」うて何もできずに居た結果、「草も高くなり」、さらにそれが野分の風に荒らされていることが言われるのだが、それは「野分にとどど荒れたる心地して」と、それが命婦の認識であったことが示される。命婦は荒廢が進んだ里邸を見て、自身の心が「心地して」と、内省的に捉えるのであった。その「いとど荒れたる」という認識は、これ以前にも命婦が里邸を訪れていた事実を前提とする。これ以前、命婦が更衣の里邸を訪れていたことは、後の北の方の「うれしくおもだたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを」という言葉からも窺える。更衣の生前は整然としていた里邸も、今となっては酷く荒れてしまった。「とかくつくるひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる」。それがさらにこの度の「野分」によって、「いとど」荒れてしまっていると、命婦は眼前の情景を以前

と比較して認識するのだった。以前から里邸に出入りがあり、里邸の過去を知るが故に、変わり果てた眼前の情景に命婦は胸絞めつけられる思いであったろう。過去と現在とを対照しての、北の方へ同情する心理がここには表れている。それは命婦の実感であった。

「月影ばかりぞ、八重律にもさはらずさし入りたる」にも、命婦の北の方に対する憐憫の情が窺える。ここで、荒廢した里邸を訪ねる人がない事実が示されることは前章に述べたが、これはそのような客観的な描写に終わるものではなく、命婦の主観を通しての描写となつていふことにも注意すべきであろう。この描写は紀貫之の「とふ人もなき宿なれどくる春は八重律にもさはらざりけり」(『貫之集』第三)を引いたものである。これは「未亡人ながら、宮仕えをする愛嬢のため独力経営してきた過去を知る人がひとしおの感を催しているの

で、このあたりがいったいに命婦の心中なればこそ次に、「月かげばかりぞ八重律にもさはらずさし入りたる」という引歌をもつた詠嘆の文が続きうるのである。この結びの引歌のもつ重さ、古歌を連想していること自体、たんに地の文でなく、命婦の囁目の嘆きとして、主情性に裏うちされて出てきたものである」(清水前掲論文)。そう思いを巡らす命婦の

感慨はいかばかりであつたらう。「門引き入るる」我が身以外に、「八重葎にもさはらずさし入りたる」ものは、「月影ばかり」でしかない。その「入る」を巡る対照は、命婦に一層の感慨を催させたのではなからうか。「月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる」は単なる客観的な情景描写に終わるものではない。そういう里邸の状況を哀む命婦の情意を盛り込んだ主観的な描写でもあつたのだ。

帝の命を果たし、命婦は里邸を後にする。

「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せむ」と急ぎ参る。月は入りかたの空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。(桐壺卷・野分の段)

ここでも、「月」「風」「草」「虫」などによって、八月らしい緊密な情景が構築されている。しかし、ここで特に注目すべきは「いと立ち離れにくき草のもとなり」であろう。「これはもちろん「草のもと、いと立ち離れにくし」という正則の述語を、連体法に倒置圧縮したものに違いない」。そして、これは「作者の詠嘆に似た、作者自身の洩らす思い入れなのである」(渡辺実『平安朝文章史』)。「作者の詠嘆に似た」「思い入れ」と言う以前に、これはその情景を体感している

はずの命婦のそれに他ならないであろう。ここで作中の命婦も、更衣の里邸を辞去するに当たって慨嘆する。そして、その作中の命婦の慨嘆が物語に現実感を与えるのである。それほどまでに、この情景は現実であつたのである。まさに、「物語において感情が表わされるとしたら、その対象たる物語の出来事は、その情意が情意たることを証として、最早すでに現実なのである。情意の表出において、物語は次々に叙述に生彩を与えていく」(上野英二「物語の言語行為」『源氏物語序説』)と言ふべきであろう。無論、それを支えているものは、すでに述べたような『源氏物語』の極めて具体的に詳細な描写であつた。¹³ こうして『源氏物語』は、現実感のある確たる物語世界を構築して行くのである。

それに対して、『宇津保物語』はどうであろうか。三章冒頭に引いた俊蔭卷の例、「月」の描写が単純で類型化した表現であることは既に述べたが、景物の美しさは波線で示したように、「をかしく見所あり」、「おもしろく映れり」などと表現される。「若小君、見めぐりて見たまへば」とあることからすれば、一先ずこれらは若小君の感覚を表したものと考えることができるが、「をかしく」「おもしろく」は概念的意味に過ぎず、そこに若小君固有の感情や情動などは感じら

れない。むしろ、これらはこの場面の一般的、客観的な描写とも理解され、それぞれの景物が「をかし」「おもしろし」という状態にあることを示すに止まっていると思われるのである。

「月隈なうあはれなり」という描写も同様であろう。これは表面的には、野分の段の「けはひあはれなり」に同じい。しかしながら、俊蔭巻の場合、事項の列挙の一つとして、唐突に附加された感があり、たとえこれが若小君の目を通しての描写であるにしても、その内容は概念的、観念的なものであって、若小君の感情を動かすほどの具体性、現実性に欠ける。同じ「あはれなり」でも、『源氏物語』が「対象の一回的な個別のあり方を、それへの情意において表現するもの」（上野前掲論文）であるのに対し、『宇津保物語』のそれは、第三章で引いた『清少納言枕草子』の「すべて、池あるところは、あはれにをかし」に見えるような、「主体の情意からは離れて、対象のあり方自体を状態として言い止めるような場合の意味に近づいていると言つてよい」であろう。

このように、『宇津保物語』は感覚表現を用いながら、それは概念的な表現に墮してしまつて、感受の主体が想定されても、そこにその情意が盛り込まれることはない。一

方、『源氏物語』には八月という時季に相応しい景物の緊密な構築によって、現実的な必然性を有し、具体的に詳細な叙述が成立していた。だから、それが感覚、感情表現によって裏打ちされると、現実感を持った叙述となるのである。喩えるならば、感受の主体の感情の吐露によって、その描写に命が吹き込まれる、とでも言えようか。感受されることにより、客観的な事実が主体による主観的な現実へと昇華し、物語の現実となるのである。ここに現実感を有する物語、『源氏物語』が生成される。『源氏物語』の世界は具体的な情景描写によって構築され、さらにそれがそれを前提とする必然性のある感覚、感情表現に裏打ちされて、現実感を以って迫ってくることになるのである。

五

野分の段が八月のことであったとすると、更衣の死の時季も自ずと明らかになる。更衣の死の時季については、物語では、「その年の夏、御息所、はかなきこちちにわづらひて」としか語られていない。玉上琢彌氏は「袴着のすんだ夏、精神的に疲れはてた身に迎えた京都の夏の高湿と多湿。長期の

結核性疾患に弱っていた更衣の身体：は、最後の症状を呈したのであった」（『源氏物語評釈』）と言う。しかし、「京都の夏の高湿と多湿」という感覚は現在の京都の気候を念頭に置いた新暦の夏の間でなく、新暦の夏と旧暦の夏とは同じではない。

しかし今、野分の段を八月七日頃のこととするならば、更衣の死の具体的な時季も明らかにすることができる。手がかかりは「後のわざ」、すなわち「七々日の供養」（吉澤義則『対校源氏物語新釈』頭注）である。

野分の段の直前に帝の悲しみを語る叙述があった。

はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにもこまかにとぶらはせたまふ。…ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。（桐壺卷）

悲嘆の涙に昏れる帝の姿を拝する者までが涙を催され湿っぽい、そういう秋であると、物語は言うが、この「露けき秋なり」は単なる断定表現ではないと思われる。これは前述した「月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる」や「いと立ち離れにくき草のもとなり」と同様の詠嘆表現に類するものであり、つまり「露けき秋かな」にも等しい詠嘆の表現であったと考えられる。ここで場面の語り手は秋であ

るということに気づき、詠嘆したのである。すなわちここに秋の訪れが示されたことになる。

須磨巻の一節にも、秋を詠嘆する同様の文があった。

須磨には、いとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。（須磨巻）

源氏流謫の地、須磨の秋を描く場面。ここに「かかる所の秋なりけり」という、これもまた詠嘆と考えられる表現がある。これは「いとど心尽くしの秋風」を受けたものであるが、これは『古今和歌集』の「木の間よりもりくる月の影見れば心尽くしの秋は来にけり」（秋上・一八四）を引く。この歌では、「心尽くしの秋は来にけり」という表現で秋の到来が告げられる。須磨巻もこの歌意を含んだ上で、「いとど心尽くしの秋風」によって、「かかる所の秋なりけり」と、秋の到来に気づき、詠嘆したのである。そして、結果として、須磨に秋が来たことが告げられるのである。同様に桐壺巻においても、「露けき秋なり」という言葉で桐壺巻の世界に、秋が到来したことが示されたのである。¹⁴

その以前に「後のわざなどにもこまかにとぶらはせたま

ふ」とあったことからすれば、立秋以前に「後のわざ」は済んでいたことになる。⁽¹⁵⁾とするならば、更衣の死亡した時季も自ずと明らかになるであろう。それらを終え、つまり四十九日を過ぎたところで秋が来たということから逆算すれば、更衣は五月の下旬から中旬あたりに世を去っていたこととなる。

『源氏物語』の翻案である柳亭種彦『修紫田舎源氏』にも、室町御所の娘のみ、力となしつ、暮せしが、幸ひにして義正の、寵を蒙り胤を宿し、喜ぶかひも夏の野の、草葉の露と消果て、早夢の間に七七日、露けき秋とぞなりにける。
(初編)

とあった。桐壺更衣にあたる「室町御所の娘」、花桐は「喜ぶかひも夏の野の、草葉の露と消果て」、夏に死ぬ。その後、「早夢の間に七七日、露けき秋とぞなりにける」。早四十九日となり、桐壺巻と同じく「露けき秋」になったと書かれている。とすれば、花桐の死は五月のことであったと推定される。時代は下るが、種彦の設定も桐壺巻の解釈の参考となろう。

五月と言えば、五月雨の時季である。更衣が世を去った「その年の夏」とは、現代の感覚での「高温と多湿」の夏ではない。当時はむしろ、五月雨の夏が念頭に登ったことであろう。とすれば、更衣の死には梅雨時の気候が影響していた

と考えられてくるかもしれない。⁽¹⁶⁾

「その年の夏」、おそらく五月に更衣は世を去った。それから帝は「はかなく日ごろ」を過ごすうちに、季節は「露けき秋」となった。さらに野分の段の八月を迎えることで、そこには五月、六月、七月、八月と、具体的な時間が帝の現実として、流れていたことが知られるのである。野分の段の時季が八月七日頃の「夕月夜」であろうと考えられることの意義は、更衣が死亡した時季を明らかにするに止まらない。帝、その他の作中人物たちがその時間の現実を生きたことをも示すのである。具体的な時間の設定がなされることにより、『源氏物語』の世界はしつかりとした現実となり、それに支えられて、帝、その他の作中人物たちは、その現実を生きることになる。

野分の段、帝が更衣と過ごした日々を述懐する場面。

かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音をかき鳴らし、
(桐壺巻・野分の段)

「かうやうのをり」とは、「夕月夜のあはれなるをりなり」(萩原広道『源氏物語評釋』)。そこで行われる「御遊び」とは、野分の段の時季を八月七日頃とするならば、中秋の名月を前にしての観月の宴ということになる。更衣の生前は美

しい月を眺めながら、共に管絃の遊びに興じたのだろうが、今年は更衣の居ない秋である。そこに名月の時季が再び巡ってきた。同じ名月を眺めるにしても、一人残された帝の寂寥感、更衣と興じたかつての「御遊び」を回想することで、一層増すことになる。これは秋という季節、月といった景物が人を感傷的にさせるといふ単純なものではない。時季を八月としたことを前提とする、以上のような事実を背景にして、帝は悲しむのである。それはいかにも、現実により得べき展開であろう。

しかし、そのような帝の心中を察しない人物が居た。

弘徽殿には、久しく上の御局にもまうのほりたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。

(桐壺卷・野分の段)

清涼殿北隣、弘徽殿の主である弘徽殿女御である。その弘徽殿から風によって運ばれる管絃の音を耳にして、帝は「遊びをぞしたまふなる」と推定する。女御は悲しみの中にある帝を余所に、「遊」んでいたのである。当然これも観月の宴である。更衣の死を嘆く帝やその周辺の人々を見て、「亡きあとまで、人の胸明くまじかりける人の御おほえかな」と恨

み言を「許しなうのたまひける」女御の気性を思うと、女御は中秋の名月の好時節の到来に、湿っぽい宮中の雰囲気に耐え切れず、宴を開こうとしたのだろう。同じ仲秋八月でも、女御には帝の時間とは全く対照的な時間が流れていたのである。

更衣の死を悼み、悲嘆の涙に昏れる帝。それに対して、更衣死後の宮中の湿っぽい雰囲気を嫌悪する女御、その行動がまた帝の気持ちを刺激する。同じ時間を巡って、相反する二人の現実がここに明らかになるのである。帝の現実と女御の現実、二人の現実は無機質な物語の現実を『源氏物語』の中に作り出すことになる。

『宇津保物語』が書かれた頃、「王朝作り物語は、既にお伽噺の文章化の段階を脱して、現実の人生なり世相なりを描くべき段階に入つてゐた」と言う(石川徹『古代小説史稿』)。しかし、『宇津保物語』がいまだその過渡期にあり、内容や叙述などの点で未熟であったのに対し、『源氏物語』は内容の点においても、叙述の点においても、既に「現実」的な「段階に入つてゐた」のである。

『源氏物語』の描写は極めて具体的に詳細なものであり、

必然性のあるものとなっていた。さらにそれらは感覚、感情表現に裏打ちされることによって、現実感あるもの、乃至は現実そのものとなった。それらの個々の現実と現実とが絡み合い、それぞれが劇的に交わる世界は圧倒的な現実感を以て我々に迫ってくる。具体的に精細な情景を以て描き出し、それらの有機的な関係の中に、現実的な物語世界を創り出して行く。これこそが『源氏物語』の世界構築と言うべきものなのであった。

注

- (1) 本文の引用は以下の通り。『源氏物語』『貫之集』『枕草子』『古今和歌集』——『新潮日本古典集成』、『毎月集』——『日本古典文学大系』、『宇津保物語』——『新編日本古典文学全集』、『修紫田舎源氏』——『新日本古典文学大系』、『源氏物語玉の小櫛』——『本居宣長全集』、『源註拾遺』——『契沖全集』、『萬葉集』——『萬葉集 訳文篇』、『源氏物語評釋』——嘉永六年刊『源氏物語評釋』。便宜、表記を換えた箇所がある。
- (2) 篝火卷、「七月五六日」の場面にも、「鈴虫」が見える。「弁の少将、拍子打ち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり」。しかし、これは声の良いものとして、「鈴虫」が引き合いに出されたものであろう。
- (3) 九月には草や虫の声は枯れてしまうのであろう。「遠けき

野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に」(賢木卷)。時季は「九月ばかり」、この頃、「浅茅が原も枯れ枯れ」「嘎れ嘎れなる虫の音」となる。夕霧卷にも、九月の小野の「枯れ」た情景が描かれる。とすれば、野分の段の「草も高くなり」「八重葎」「蓬生」「虫の音しげき浅茅生」などの、草や虫の盛りの様はそれ以前、八月のものであったと考えられる。

(4) したがって、神尾暢子氏が「八月にもなりぬれば、…つごもりがたに、風いたく吹きて、野分たちて雨などふるに」(和泉式部日記)、「九月一日頃に、…野分のたちて、風いと荒らかに」(狭衣物語)などの例から、「野分は、仲秋に現出するものであり、具体的に限定すれば、八月後半から九月初頭にかけて現出するものであった」と言い、「野分たちて」を台風一過と解して、野分の段の「野分」を八月下旬、命婦の派遣を九月初頭のこととする(王朝語「野分」の多元的考察「王朝」第五冊)のには、従えない。

(5) この他にも、「夕月夜」の例がある。「四月になりぬ。…のどやかなる夕月夜に」(明石卷)、「卯月ばかりに、…艶なるほどの夕月夜に」(蓬生卷)、「朔日ごろの夕月夜に」(浮舟卷)。明石卷、蓬生卷には具体的に何日の「夕月夜」なのか書かれていない。浮舟卷の「朔日ごろの夕月夜」については、一条兼良は「曆道に曆をつくる事をば推歩の術といふ。一月のこよみをば四段に分て朔上望下とかぞふる也。故に上の弓はりの時までをば一日ごろといふ也」(源語秘訣)〔中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊』第

二卷」と言い、「七日の夕月夜」としている。また、「夕月夜」については、「夕月夜は月のはじめの月。：月の大小によりて、一日二日の夕よりも出現ある事分明候歟。十日あまりのころまでも、暮天に出るほどの月を夕月夜とよみならはし候哉」（堯孝『桂明抄』〔統群書類従〕十六下）、「夕づく夜は、ゆふべから月の出づる四日五日の頃也。」（正徹『正徹物語』〔日本古典文学大系 歌論集 能楽論集〕）とする説もある。

(6) 萩原広道は、「夕月夜は宵のほど月夜にて、暁の闇なる比を云。八月の十日ごろのさま也」と言う（『源氏物語評釋』）。但し、根拠は示されていない。

(7) 『源氏物語』帚木巻、いわゆる「雨夜の品定め」において、左馬の頭が「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおほえめ」と語るように、荒廢した屋敷に美女が住み、男がそれを見出だすという設定は当時の物語に好んで取り上げられたものらしい。俊蔭巻のこの場面も、その類例と考えられる。

(8) 「荒れたる家の」に、「あはれなるもの、下に」（弥富本・刈谷本）、「哀なる物ノ下ニ」（伊達本・静嘉堂本）と傍注がある（田中重太郎他『枕冊子全注釈』）。また、「能因本「あはれなるもの」（一二三段）の末尾にはほ同様の内容が記されていることから、何らかの関連が考えられる」（『新編日本古典文学全集 枕草子』頭注）。書かれる情景は事項の列挙に思われるが、「水草がちに荒れ青みたる」「絶え間絶え間より、月影ばかりは、白々と映りて見えた」などと、『源氏物語』ほどではないものの、詳細な描

写となっている。

(9) 同様の情景の構築は帝の歌「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」にも、見出すことができる。ここでも、「野分」の風は単なる風で終わるのではなく、「宮城野」、すなわち宮中に吹いて、「露」、すなわち帝の涙を催させ、また音となって帝の耳に聞こえ、それが更衣の里邸の「小萩」を吹く光景を思い起こさせるというように、有機的に組み合わされ、秋八月のこの場に相応しい必然性を持った具体的な情景を作り出している。

(10) 「野分の段の時間を示す尺度は月である。この月は勅使が宮廷を出る時は「夕月夜のをかしき程」で、さし出たばかりであったが、更衣の里邸では「八重葎にもさはらずさし入り」、いま離れてきた宮廷と新なる場面である里邸とを一つの世界につつま役目をする。いまや空高くさしのぼり、光も一段と増した趣で、宮廷を出て立ってよりの時の経過もおのずと感じられる」（清水好子「場面と時間」『源氏物語の文体と方法』）。

(11) 古来、「野分だちて」か「野分たちて」か、解釈の分かれる箇所である。殆どの校注書が「野分だちて」としているが、「たちては其風の吹立つ也。たをにこりよみて、野分めきてとやうに説る注はひがごと也。ふく風などの詞なくては聞えぬこと也」（萩原広道『源氏物語評釋』）のように、「野分たちて」と解するものもある。広道は、「ふく風などの詞なくては聞えぬこと也」と、主語の有無を問題としているが、玉上琢彌氏は「日本語、とくに古代日本語は主語を必要不可欠のものとはしない」として、

「野分だちて」としている（『源氏物語評釈』）。また、野分の「風の吹立つ」ことを言う場合、当時は「一般に、「野分吹く」または「野分す」が用いられて」おり、「野分だちて」という表現を「風立つ」の類推からするところの「野分立つ」であると見た場合、「風立つ」「嵐立つ」の例からしても、出現の時期が逆に早すぎないように思われる上に、「風立つ」「嵐立つ」が、もっぱら和歌に用いられているのに較べ、これがはじめ散文に用いられ、和歌に採用されるのが遙か後になり、しかも用例が極めて少ないといった、理論上からではあるが、矛盾が感じられる」（辻田昌三「野分だちて」『島大国文』第十巻）と言う。仮に「野分だちて」としても、「たちては其風の吹立つ也」と言うように、「たつ」は「事象の生起した状態を言うものであって、経過または完了を表すものではないことは、これまた他の「―立つ」と同様である」（辻田前掲論文）。したがって、「野分だちて」が「野分が既に過ぎ去った後」（『日本古典文学大系 源氏物語』補注）、すなわち「台風」過（高橋和夫『古典に歌われた風土』）と解することには無理がある。玉上氏は、「野分だちて」とした上で、「台風がすぎた夕方」と解している（前掲書）が、これも成り立たないであろう。

(12) 『源氏物語』には野分の段の他にも「膚寒」しの例が見える。「秋風、谷よりはるかに吹きほりて、いと膚寒きに」（玉鬘巻）、「風膚寒く、ものあはれなるに誘はれて」（横笛巻）、玉鬘巻、横笛巻共に具体的な時季を明らかにし得ないが、横笛巻は直前に「雁」の語が見られることから、九月のことか。両巻における「膚寒」しはその場

の感覚であり、野分の段や『毎月集』の「膚寒くなる」変化を表わすものとは性格を異にする。

(13) 「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし」（桐壺巻・野分の段）の「なるべし」も帝の推定であろう。ここに帝は命婦の復命を受けてから現在に至るまで、呆然と過ごしていたことに自らが付くのである。時間の経過を感覚的に表現したこの叙述も、物語に現実感を与えるものであろう。

(14) 「秋なりといふに時のおしうつりたることをおもはせたる筆のはたらきさらにめでたし」（秋原広道『源氏物語評釋』）。また、橋本治『黛変源氏物語』もここを「その御尊顔を拝したてまつる者の胸までも露しるき、秋とはなつた」と記す。

(15) この直後に「御かたがたの御宿直なども絶えてしまはず」と言うのは、更衣の供養が全て終わってなお、帝は他の妃に御渡りになることがなかったということを言うのであろう。

(16) 一般的には、「源氏物語」中で主要人物が死ぬのは秋が多い（玉上琢彌『源氏物語評釈』。柳亭種彦の辞世の句にも、

源氏の人々のうせ給ひしはおほかた秋なり、とありて、
我も秋六十帖の名残かな

とある（伊刈章『人物叢書 柳亭種彦』）。

（なりた・だいち 成城大学大学院博士課程前期）